

国際連携活動の実際とノウハウ－DRFの活動を通して

内 島 秀 樹, 杉 田 茂 樹, 鈴 木 雅 子
西 蘭 由 依, 土 出 郁 子

抄録：デジタルリポジトリ連合（Digital Repository Federation, DRF）は国立情報学研究所のCSI事業による財政支援等により、機関リポジトリに関する国際的な連携活動を行ってきた。本稿では、これらの活動の内、機関リポジトリ関連の国際会議に数年にわたり継続的に参加した経験を踏まえて、国際会議での口頭発表、ポスターセッション、海外のオープンアクセスジャーナルへの投稿等の実際とノウハウについて報告する。

キーワード：デジタルリポジトリ連合, DRF, ARIADNE, SPARC Digital Repository Meeting 2008, Open Repositories 2012, Open Scholarship 2006, ICTK (International Conference on Trends in Knowledge and Information Dynamics) 2012, 国際連携, 論文発表, 口頭発表, ポスター発表, 海外出張

1. はじめに

千葉大学のCURATORの設置を機関リポジトリ運動の始点と考えると、日本でも10年以上にわたり機関リポジトリによるオープンアクセス運動が進められてきたことになる。この間、リポジトリ活動の不可欠の一部として、多様な国際連携活動が行われてきた。国立情報学研究所のCSI事業による財政支援（以下、CSI予算）により、テーマを限定した海外出張や国際会議開催等が可能になったことが背景にある。

本稿では、国際活動の中でも特に国際会議への参加について、口頭発表及びポスターセッション参加など能動的な活動に絞って報告する。また、関連するオープンアクセス雑誌への投稿と、海外プロジェクトとの連携についても部分的に触れる。

国際会議の開催方式には確立された慣習があり、この慣習に習熟することにより、部分的ではあるが国際活動のノウハウを身につけることができる。これまでこうした活動経験がない図書館職員や図書館コミュニティに役立つ情報を提供することが本稿の主要な目的である。なお、各項の執筆分担は以下のとおりである。

1・2	内島	5	西蘭
3	杉田・鈴木	6	土出
4	内島	7	全員

2. 国際会議参加の実際

2.1 海外派遣の目的

デジタルリポジトリ連合（Digital Repository Federation, 以下DRF）はCSI予算により国際会議等に参加して、日本のリポジトリ活動の広報と欧米を中心とするリポジトリ運営者や大学図書館関係者、助成機関の担当者などとの交流を図ってきた。

この項では、そうした活動を今後も継続していくためのいわば活動ノウハウについて述べたい。

海外派遣については、国立大学図書館協会による派遣事業¹⁾がある。これは長期と短期に分けて、調査・研究や国際会議参加などの目的で応募できる。管理職を除く若手・中堅層の研修という色合いが強い。

これに対してDRFが行ってきた海外出張は、主にリポジトリやオープンアクセスに関する国際会議に口頭発表やポスターセッション参加することにより、我が国のリポジトリ事業について広報することが大きな目的であった。併せて、参加する図書館職員が国際的な舞台での活動に習熟することにより、大学図書館活動の国際化につなげていくことも意識していた。

2.2 国際会議出席のノウハウ

次に国際会議に参加する場合の具体的な手順について述べる。

(1) 国際会議の選択

まず、出張目的に合わせてターゲットとなる国際会議（等）を選ぶことが肝要である。もちろん、単に出席するだけでなく、口頭発表ないしはポスターセッション参加を前提にすると、何をどのような聴衆に訴えたいのか、モチーフを明確にする必要がある。

機関リポジトリやオープンアクセス関係に絞ると、この後の各論で説明する各会議が一つの目安になる。ここではこれらの国際会議等について概括的に説明する。

選択の際の最も大きな要素が会議のテーマと開催

地である。開催地により当然参加者のデモグラフィックは大きく異なり、テーマも微妙に異なってくる。

概ね世界から集まる会議は、Open Repositories 20×× (××には年次が入る)²⁾である。機関リポジトリの特に技術担当の専門家の年次総会のような趣を呈しており、リポジトリの世界でアピールしたい技術開発的なテーマがある場合は最適の会議である。

これに対して、程度の差はあれ、特定地域から集まり、従ってテーマも特定地域や国が対象になりやすい会議がある。

アメリカで開催される SPARC Digital Repositories Meeting 20×× (××には年次が入る、以下 SPARC DR Meeting)³⁾は、主催は SPARC, SPARC Europe, SPARC Japan の3組織であり、国際会議と言えるが、北米からの参加者がほとんどである。テーマもアメリカ国内の機関リポジトリの運営の現状を踏まえた事例報告や設定が多い。なお、SPARC DR Meeting は SPARC Open Access Meeting⁴⁾と名称を変えて、2012年にも開催されている。

ヨーロッパの機関リポジトリ運動の中間総括として開催されたのが、Open Scholarship 2006⁵⁾である。参加者も発表もヨーロッパからがほとんどで、会議の目的もそれまでのヨーロッパの機関リポジトリによるオープンアクセス運動の中間評価という点に集約されていた。

CERN Workshop on Innovations in Scholarly Communication (OAI×, ×には回次が入る)⁶⁾は毎回ジュネーブの CERN (欧州原子核研究機構)を会場にして開催される。プログラム委員会はほとんどがヨーロッパ出身者で固められている。開催組織と開催場所が象徴するように、主な参加者と発表者もヨーロッパ出身者であり、ヨーロッパ色が濃厚である。

ベルリン宣言はドイツのマックスプランク研究所が採択したオープンアクセス宣言である。このベルリン宣言のフォローアップであるベルリン会議× (×には回次が入る)⁷⁾は、採択地を反映して当然ヨーロッパ色が強いが、開催地を世界各地に求めているため、開催地によりテーマや参加者に特色が出る傾向がある。筆者も参加したベルリン9はワシントンで開催されたが、プログラム委員会の構成員はアメリカ中心であり、発表者やテーマも、個人的な印象であるがアメリカ色が強かった。

口頭発表やポスターのテーマは会議により個性が

出る。Open Repositories 20××は、オープンアクセスに関する政策やアドボカシーは扱わないことになっており、主に機関リポジトリの技術開発に関する発表などが対象となる。ベルリン会議は、ベルリン宣言のフォローアップのためか、システム開発の話はあまりなく、政策的な発表が多い。助成団体の代表者なども多数参加する。

OAI×や Open Scholarship 2006 は、大きな特色はなく、オープンアクセスのアドボカシーやシステム開発など多様なテーマが取り上げられている。

このように会議により、テーマや対象、発表者や参加者の出身国が微妙に、時には大きく異なるので、そのあたりをよく調べて、自分の目的にあったものを選ぶことになる。これが最も重要な第一歩である。

参加する会議の選択には、オープンアクセス関連であれば、下記の Open Access Directory のイベントリストや、D-Lib Magazine の会議等リストなどが参考となる。

[Open Access Directory]

Conferences and workshops related to open access
<http://oad.simmons.edu/oadwiki/Events>

[D-Lib Magazine]

Meetings, Conferences and Workshops
<http://www.dlib.org/groups.html>

次に開催日程である。日本の会計年度との関係で、これが意外に重要なファクターとなる。国際会議で、春や初夏 (6月~7月) に開催されるものは少なくなく、予算の執行や準備、人事異動など日本特有の要素を考えると、この時期の国際会議への出席は難しいことが予想される。実際、DRF の海外出張も CSI 予算によることが多く、予算執行の面からも春~初夏の参加実績はほとんどない。つまり、夏から秋以降に開催される会議がターゲットにしやすいと言える。

(2) 応募

国際会議はおおむね、口頭発表とポスターセッションを公募する。ただし、口頭発表は招聘者のみのケースもある。欧米では図書館員は専門職であり、会議での口頭発表やポスターセッション参加は業績と考えられている。オープンアクセスやリポジトリだけでなく、図書館に関する多様な会議 (学会) が開催され、多くの参加者を集める背景にはキャリアと密接に関連する欧米の図書館専門職の世界がある。

実際の応募の際には、(1)で述べた国際会議の性格をよく吟味し、また申請の要項(対象とする小テーマを列挙する会議がほとんどである)をよく読んで、相手の趣旨に沿ったテーマ選択と書き方をすることが重要である。

口頭発表もポスターセッションのエントリーも、応募は多くて概ねA4判の用紙1枚や更にその半分以内のアブストラクト(=英語の字数制限がある)を提出することが多い。著者は1人でも複数(共著)でもかまわない。

書き方であるが、何分短いことが多いので、発表内容と特色をシンプルかつ明確に述べる。査読を通過すれば、実際の発表は、かなり自由度があると考えてよい。

口頭発表の参加者になっても、会議自体の参加申し込みは別途自分でする必要がある場合が多いので注意が必要である。

ポスターセッションの場合はもちろん自分で参加登録する必要がある。また、発表形式のセッションがない時は会議には参加せず、ポスターを送付し会場で掲示してもらうことも可能である。

(3) 実際の発表

口頭発表の場合、一コマおおむね15分から20分程度で細かく区切って進行していくケースがほとんどである。パワーポイントを使ってプレゼンテーションをする場合が多く、英語での発表を想定すると、英文でスクリプトを作成して読み上げるだけで発表を終えることができるように準備しておくことが望ましい。もちろん、アドリブで付加的な話をすることは発表者の英語力によってはできないことはないが、スクリプトは作成しておいた方がよい。

プレゼンテーション資料の作り方や効果的な発表の仕方は、日本語での発表と同じである。文字数を少なくして、画像やイメージを多くし、聴衆とアイコンタクトを取りながら、説明することが望ましい。

これは筆者の経験であるが、スクリプトを作成し読み上げた場合、日本語での発表の場合より早く終わる傾向があるように思える。

ポスター参加の場合は、ポスターセッションとして発表の時間を与えられることもあれば、会議中の一定の時間を指定して、その間は説明者がポスターの脇に控えるセッションの形式もある。口頭発表の場合、当然スクリプトは作るべきだが、そうでない場合も説明の要旨はスクリプトとして作っておいた方がよい。ポスターの内容に関して質問されることになるからで、アドリブで答える場合も、骨子を英

語で把握していれば対応は比較的容易である。

(4) 事務手続き

海外出張に必要な事務手続きは、国立大学であれば、概ね同じである。出張先(都市)及び日程により、旅費規定に従って支弁される予算(宿泊費と日当)が決まる。航空運賃はエコノミークラスでの実費支給である。

不可欠な書類は言うまでもなく、パスポートである。申請から交付まで若干時間(1週間程度)がかかるので、これから申請する場合は注意したい。

(5) 宿泊先

ほとんどの会議は、会期中に指定ホテルを割引価格で提供している。ホテル自体が会場であることもある。日本のレートから考えるとやや割高のケースが多いが、会場への移動の便や安全面を考えると、推奨している指定ホテルを予約することがベストである場合が多い。

(6) エンターテイメントと参加費

欧米等で開催される国際会議は、「楽しむ」要素がふんだんに盛り込まれている。会期中のtea breakには豊富なドリンクやスナックが用意される(図1)。ランチも含まれることがほとんどである。日本風に言うと懇親会であるが、海外ではディナーが催され、かなりフォーマルな場合もあるし、比較のカジュアルな場合もある。

出席費用はこうしたサービスに対する費用も含み、日本円で換算すると2~3万円の場合が多く、これが国際会議(学会)のスタンダードと言ってよい。参加費無し、懇親会数千円という国内開催の国際会議は日本の大学図書館界のドメスティックな慣習である。



図1 SPARC DR Meeting 2008の豊富なフードサービス

筆者の経験ではフォーマルだったのが、2006年にグラスゴーで開催された Open Scholarship 2006 で、約1時間のドリンクパーティの後、ディナー会場に移り、バンド演奏付きで夜遅くまで食事と会話を楽しんだ。ちなみに筆者のテーブルには、サザンプトン大学やエジンバラ大学の機関リポジトリでは著名な関係者が同席し、稚拙な英語ではあったが、会話を楽しむことができた。グラスゴーの英語が「なまり」がきつく、わかりにくいという話題で盛り上がったことが記憶に残っている。

逆にカジュアルだったのが、SPARC DR Meeting 2008 で、2杯分の引き換え券をもらって自由にドリンクを選び、5分程度のショートプレゼンテーションを見ながら、わいわい騒々しく(?)楽しむ形式であった。笑いを取ることもアメリカらしく、このショートプレゼンテーションに参加した当時筑波大学附属図書館在職中(現東京大学附属図書館)の金藤伴成氏のジョークが、アメリカ人に受けていた記憶が鮮明に残っている。

(7) 時差ぼけ

アメリカの会議は時差が大きく体力的にもきつい。東部と西部で数時間の違いはあるが大差ない。これに比べてヨーロッパは時差が小さい上、夕方到着が多く、適応がしやすいメリットがある。本質的な問題ではないが、会議の内容を有効に把握するためには重要な要素とも言え、時差ボケがきつい人はヨーロッパがお勧めである。

(8) ソーシャルイベント

国際会議は会議終了の翌日あたりにソーシャルイベントを用意していることが多い。近場の観光地を訪問するなど楽しめる機会を提供している。口頭発表など責務を終えて、ほっとしたところで、こうしたイベントに参加するのもいい。

(9) 有効な出張とするための工夫

会議は移動を含めて1週間程度かかることが多く、他の組織を訪問することは簡単でない場合が多い。しかし、これもケースバイケースで、近場の機関(大学図書館など)であれば、半日程度の時間があれば訪問も可能になる。業務であれば出張日程を延長することも可能なので、会議とは別日程で訪問を組むこともできる。ボルチモアで開催された SPARC DR Meeting 2010 に参加した大阪大学の土出郁子は、ワシントン開催の別の会議にも参加している。北海道大学(当時在職中)から Open Scholarship 2006 に参加した杉田茂樹、鈴木雅子の両名

は会議終了後、複数の大学と英国合同情報システム委員会(Joint Information System Committee:以下 JISC)助成の情報関連組織である UKOLN を訪問している。情報を収集して有効な旅程を組みたい。

(10) プレゼンテーション資料とポスター

国際会議では、日本のように資料があらかじめ印刷されて配布されることは皆無である。会議では参加者は視線を前に向けてプレゼンテーション(発表者)に集中し、資料を見るために下をうつむいていない。

プレゼンテーション資料は、ポスターとともにおおむね会議終了後、会議のHPで公開され、会議やポスターセッションの内容を事後に確認することができる。口頭発表の資料は、事前に組織委員会等に送付するが、ポスターは事前に送付する場合と、持参してセッション開催場所で指定された場所に掲示する場合がある。

(11) 欧米間の雰囲気の違い

筆者の数少ない経験なので普遍的かどうか確証はないが、アメリカの SPARC DR Meeting では、質問のセッションでは、質問用のマイクの後ろに長い行列ができるほど活発な質問が行われた。一方、Open Scholarship 2006 では、日本ほどではないが、質問は少なかったように感じた。これはヨーロッパとアメリカの人々の雰囲気の違いを反映しているかも知れない。質問のセッションがある場合、そうしたお国柄を知っておくのも有効である。

(12) 帰国後のこと

DRF の出張では、出張中にメーリングリストを利用してオンゴーイングで報告をすることも頻繁に行われた。会議の臨場感を感じてもらうためにはいいやり方であるが、出張者の負担は重い。

帰国後に報告を出す場合は、資料が公開されるのを待って、現地での視聴内容と併せて内容を確認できるメリットがある。英語でのリスニングは時差ボケもあり誰でもきついものだが、事後の報告作成では口頭発表の資料を使うこともできることは、国際会議に出張する場合の報告に恐怖(?)を抱かないためには知っておいていいことのひとつである。

次章以降では、本稿著者各々の経験に基づき、DRF 等による海外出展事例を紹介する。

3. ARIADNE 誌への論文発表と Open Scholarship 2006 へのポスター出展

北海道大学が2005年に公開した機関リポジトリ「北海道大学学術成果コレクション」のコンテンツ構築活動についての報告論文⁸⁾を執筆するとともに、同内容で国際会議でのポスター発表⁹⁾を行ったものである。

論文発表先は、その当時オープンアクセスや機関リポジトリに関する記事を多く掲載していた ARIADNE 誌及び D-Lib Magazine 誌を候補とした。D-Lib Magazine 誌の記事内容は、どちらかという計算機システム寄りの記事が多く、執筆内容は業務運営に関するものであったため ARIADNE 誌を選択した。また、ARIADNE 誌が2002年に掲載したステファン・ピンフィールドほか著「e プリント機関アーカイブのセットアップ」¹⁰⁾の内容が北大の機関リポジトリの立ち上げにきわめて有益であったため、恩返しの意味で ARIADNE に論文を載せたいというモチベーションがあった。

ARIADNE 誌は、JISC の助成により、UKOLN が刊行している、オンラインオンリーのオープンアクセスジャーナルである。論文出版加工料はない。本文の執筆をすすめるのと並行して半ページほどのアブストラクトを作成して送付し、受理する旨の通知があった。本文、アブストラクトとも、まず日本語で執筆し、英訳した上で、翻訳専門業者に英文校閲を外注した。日本語段階では語の選択に拘らず、短文ではきはきと、文意が単刀直入に伝わるよう心がけた。このため自力による英訳作業も容易だった。翻訳業者は、科学文献翻訳を手掛けるいくつかの業者から見積りをとって決定した。候補は、北海道大学所属教員がよく和文英訳や英文校閲を発注する先から選んだ。図書担当係がその支払い業務をおこなっていたため、どのような業者があるかはもともと認知していた。納品された英文中の専門用語の語選択などを確認した上、編集部へ送付した。原稿標題を「From Zero to a Thousand」(北海道大学の機関リポジトリの文献数が1000件を超えるまでの活動を述べる報告であったため)として送ったところ、編集者から「From Nought to a Thousand」と変更してはどうかとの提案があった。モータースポーツの短距離競技などを表現する際に当地で使われるこなれた言い回しであるという(日本語の「ゼロヨン」等に相当する)。機関リポジトリ構築業務において、「編集段階でタイトルすら変わることがある」という話を教員から聞かれることがあり、それを実感できた体験であった。さらに、編集者からの助言によりいくらかの直しがあり原稿は確定し

た。

国際会議への出展は Open Scholarship 2006¹¹⁾を選んだ。Open Scholarship 2006 は、New Challenges for Open Access Repositories を副題として、2006年10月18日~20日に英国グラスゴー大学で開催された国際会議である(図2)。機関リポジトリ構築・運営の先駆的存在として北海道大学が事業運営の参考とした英国グラスゴー大学、米国ロチェスター大学等のリポジトリ管理者が組織委員をつとめていること、2日半にわたって機関リポジトリに関するあらゆるテーマを取り上げることなどから同会議への参加を決めた。



図2 Open Scholarship 2006 主会場(グラスゴー大学)

Open Scholarship 2006 ではポスターセッションが企画されていた。当時国内の大学図書館界では「ポスターセッション」が行われることはほとんどなく、したがって学会ポスターの作成経験もほとんどなかったが、前記の ARIADNE 投稿論文のアブストラクトを流用して応募したところ受理された。慣れぬ中、パワーポイントを使用し、所定の A1 判の発表ポスターを作成し、大学生協への外注により印刷を行った。ポスターは初日の開始前に自身で所定のボードに貼ることになっており、機内持ち込み手荷物にできなかったため、ひやひやしたことを覚えている。

Open Scholarship 2006 のポスターセッションでは、壇上からの口頭プレゼンテーション機会は設定されておらず、セッション時間帯にポスター脇に待機し、足をとめてくれる人と対面で対話するのみの形だった。語学力を補うため、事前に、同行の教員に発表内容や背景情報を詳しく説明し発表現場での助力を依頼した。また、ポスターを縮小印刷した A4 判のハンドアウトやノートパソコンを持参し、必要に応じ、指差して口頭説明を補足できるようにした。

この国際会議参加にあたっては、機関リポジトリ

運営における広報戦略上のある点について、海外諸大学がどのような方針で行っているか情報収集を行いたいと考えていた。そこで、1問だけのアンケート用紙を印刷・持参し、ポスターを見に来てくれた他国からの会議参加者に、その場で回答を記入してもらった。各回答はポスターの周りにどんどん貼るようにし(図3)、英語会話の糸口がなかなか作り出しづらい中で、コミュニケーションの道具ともなったように思う。

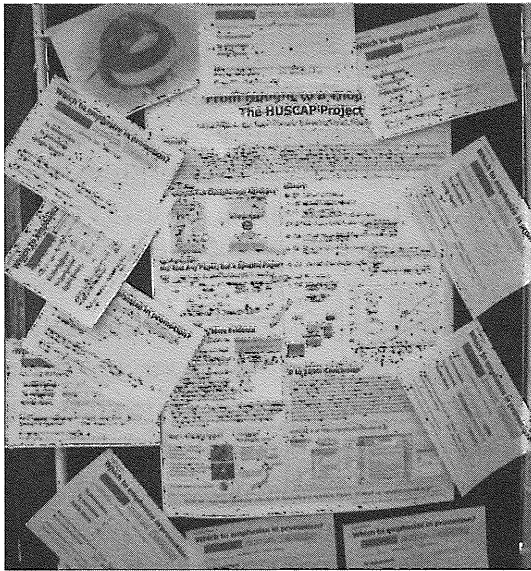


図3 来訪者のアンケート回答を逐次貼付した発表ポスター

Open Scholarship の会期終了後、貴重な海外出張機会なので、英国のいくつかの活発な機関リポジトリ構築大学を訪ねた。訪問先は、海外の関連メーリングリストで注目すべき活動内容の紹介のあった大学を選択した。旅程の最後に、ARIADNE 誌を刊行する UKOLN が事務局を置くバース大学を訪問した(図4)。対応してくれた編集者とは現在も



図4 UKOLN が本拠とするバース大学構内で ARIADNE 編集長リチャード・ウォーラー氏と

親交があり、東日本大震災に際し安否を気遣う電子メールをいただいた。

4. SPARC DR Meeting 2008

2008年の11月17日～18日の2日間にわたり、SPARC, SPARC Europe, SPARC Japan の共催によりポルチモアで開催されたのが、SPARC Digital Repositories Meeting 2008 である。SPARC DR Meeting は2004年にワシントンで第一回を開催しており、その際には、国立情報学研究所の職員が参加し、当時日本で行われていた機関リポジトリソフトウェア実装実験の報告を行っている。

SPARC DR Meeting 2008 は、口頭発表とショートプログラムから構成され、両者とも査読があった。口頭発表は筆者を含む4人の共著で応募した。ショートプログラムは、先に触れたように筑波大学から応募があり、金藤氏が発表を行っている。

国際会議の口頭発表の応募は初めての経験で右も左もわからない状況であったため、応募のアブストラクトは、DRF のメンバー数人で中身を議論して作成した。

このとき痛感したのは、査読を通すためには、何を主張したいのか明瞭でメリハリの利いた文章にする必要があるということである。例えば、プロジェクトとしての DRF の紹介を行うのであれば、DRF がどんな「組織」であるかをスタティックに述べるのではなく、DRF がどのようにイニシャチブのターゲットを設定し、その設定に向けていかに戦略を練り、それを実践することによりどのような効果を生んだのか、自慢話のようになるのを厭わず、DRF の活動の優位性やメリット・効果をしっかりと強調するということであった。ひとことで言うと、応募にあたっては「謙虚ではいけない」、ということである。

しかし、英語の力は如何ともし難いので、識者に応援を頼んだ。英語の正確さは欧米の査読付きの会議(発表)に応募するときは絶対的条件であるが、日本の図書館員の標準的な英語力を想定するとネイティブと競争するのは無理がある。日本語で原案を作成し、アウトソースで英語化するのも一つの方法である。また、筆者らのように語学力のある教員や識者に協力を依頼してもよい。独自に英文を作成する場合も、ネイティブチェックは必須であろう。

SPARC DR Meeting 2008 は、「新たな地平線、付加価値サービス、政策環境、キャンパス出版戦略」の4つのテーマから構成され、それぞれで、発表の募集が行われた。筆者らは、DRF のコミュニティ活動を説明するために最も適したテーマとして付加



図5 SPARC DR Meeting 2008 での筆者等

価値サービスを選択した。リポジトリに付加的な観点やサービスを加えることにより、利用者 (=研究者) にリポジトリの意義を広報する戦略がリポジトリ振興のコミュニティ活動として成功した、という文脈での説明が DRF の活動にフィットしていると判断したためである。



図6 SPARC DR Meeting 2008 のディスカッション兼ランチの会場

発表は、「A usage-centered approach to the promotion of institutional repositories」と題して、コンテンツの実際の利用実績の強化が理念的なアドボカシーや義務化より重要であるとの視点から、DRF 関連の複数プロジェクトを束ねて、日本のリポジトリイニシアチブの優位性を説明した。紹介したプロジェクトは、ROAT、京都大学のノーベル物理学賞受賞論文（益川、小林両氏による）や学術雑誌 Cell に掲載された iPS 細胞に関する山中論文によるリポジトリの広報活動、北大の AIRway、そして ILL 需要とリポジトリ利用との相関関係を分析した科研プロジェクトなどである。査読を通過したアブストラクト及び発表のパワーポイントは下記で公開されている。

[アブストラクト]

<http://www.sparc.arl.org/meetings/ir08/program/index.shtml>

[発表]

<http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/>

2297/12488

[会議の HP]

<http://www.sparc.arl.org/meetings/ir08/index.shtml>

同じテーマでは、ドイツ（ゲッチンゲン大学ロツソー図書館長）、アメリカ（ネブラスカ・リンカーン大学ギェスケ図書館長等）から2つの発表があり、モデレータはカナダ研究図書館連合（Canadian Association of Research Libraries: 以下 CARL）の非常勤研究員のキャサリン・シーラーさんが務めた。

副産物として、この会議を利用してヨーロッパのリポジトリプロジェクトである DRIVER と DRF の間で MoU を結んでいる。DRIVER のリーダーは、筆者と同じ枠（付加価値サービスのセッション）で発表したゲッチンゲン大学のロツソー図書館長である。

また、モデレータであるシーラーさんからは、帰国後、CARL での議論のため発表の英文要旨を入手したいと連絡を受けた上、DRIVER コミュニティをベースにしたオープンアクセスリポジトリ連合（the Confederation of Open Access Repositories: 以下 COAR）の設立総会で同じく創設メンバー機関の構成員として再会することになった。欧米の大学図書館界やリポジトリ・コミュニティでは人的交流が活発であり、そうした雰囲気も国際会議で実感することができるのがメリットである。

5. Open Repositories 2012 へのポスター出展

Open Repositories（以下、OR）は、リポジトリの開発や運用に携わる関係者が世界中から集まり情報の共有や議論を行う国際会議で、ヨーロッパとアメリカを交互に開催地としながら2006年より毎年開催されている。DRF は英国の RSP（Repositories Support Project）と共同で、OR2012（2012年7月9日～13日に英国エジンバラ大学にて開催）へポスター出展を行った。RSP は、英国の高等教育機関における機関リポジトリの進展を目的としてノッティンガム大学主導で始まったプロジェクト¹²⁾で、研修事業や各機関への助言等を主な活動内容とするものである。2012年1月、DRF は RSP プロジェクト・コーディネータ（当時）のジャクリーヌ・ウィッカム氏を招き、日英両国におけるリポジトリ・マネージャ向け研修活動に関する報告・意見交換を行った。この DRF RSP Meeting において、オープンアクセスと機関リポジトリ構築に係る人材養成について日英の協力関係を推進していくことが

有効であるとの共通認識が得られたことを受け、同年3月、DRF、RSPに、UKCoRR (The United Kingdom Council of Research Repositories)¹³⁾を加えた三者間において、国際連携に関するMoUが結ばれた。機関リポジトリ構築に係る人材養成における知見と経験の共有等を目的としたこのMoUに基づき、今後の関係構築の第一歩とするため、また両方の相互理解を深め、協力関係を推進していくことの意義を国際的に広くアピールするため、OR2012へのポスター共同出展を行うこととした。

ポスターは、“Sharing experiences and expertise in the professional development of promoting OA and IRs”と題し(図7)、前述のMoU締結について紹介するとともに、日英両国のリポジトリ・コミュニティの活動には共通点や相互に学ぶべき点があること、人材育成に関して相互協力していくことが両国のオープンアクセス、リポジトリ促進に繋がるという主旨のアブストラクトを作成して応募し、採択された。

ポスターは、日本側で文面・レイアウトの原案を作成し、英国側とメールで意見を交わしながら、完成させた。文面は、日本側で作成し、ネイティブ・スピーカーである英国側には内容の確認と英文の校正を依頼した。また英国側には、画像ファイルの手配やポスターの印刷・搬入といった細々としたことにも協力してもらい、共同作業をスムーズに行うことができた。

OR2012では、日本からの7つを含め、各国からの60を超えるポスター発表が行われた。メインセッションと同様に研究データや、リポジトリとCRIS (Current Research Information System¹⁴⁾)との連携をテーマとしたものが複数見受けられ、リポジトリをめぐる世界的関心が現在どこにあるのかが伺えた。開会式に続いて“Minute Madness”と呼ばれるセッションが設けられ、各ポスター発表者は、会議参加者が揃う中、1分間のプレゼンテーションを行う機会が与えられることになっていた。この前日に参加したRSP主催のワークショップ後に英国側と簡単な打ち合わせを行い、日本側が事前に準備していたスピーチ用原稿に目を通してもらい、日本側がプレゼンテーションすることとなった。前夜から練習を重ね原稿も暗記したつもりでも、いざ本番を迎えると結局原稿を読み上げる形となってしまったことは大きな反省点であるが、他の発表者の、時にユーモアを交えながらの堂々とした話しぶりは大変勉強になった。“Minute Madness”後、ポスターは会場に展示され、発表者と関心を持つ参加者とが直に意見交換を行えるが、ここに人を呼び込むためにも先のプレゼンテーションが与える印象やインパクトは重要と言える。OR2012での各セッションの様子は録画が公開されている¹⁵⁾が、ORに限らず昨今では多くの会議でインターネット中継や録画公開が行われている。口頭発表を行う際には事前にこのような録画等を参照することで、場の雰囲気を読み、優れたプレゼンテーションの技術を学ぶことができる。

ORには図書館員・研究者・ディベロッパー・学生等と多様な立場の参加者がいる。発表は目的にとどまらず、多様な人的ネットワーク構築・継続のためのひとつの手段でもあり、各々がその研究活動や取り組み等をよりよく展開させる可能性を広げられる機会として臨むことで、実り多きものとなるだろう。

6. ICTK 2012 (インド) での口頭発表

ICTK (International Conference on Trends in Knowledge and Information Dynamics) 2012¹⁶⁾とは、Documentation Research and Training Centre¹⁷⁾ (以下、DRTC) の設立50周年を記念して開催された国際会議である。会期は2012年7月10日から13日までの4日間、バンガロールのNimhans Convention Centreで行われた(図8)。

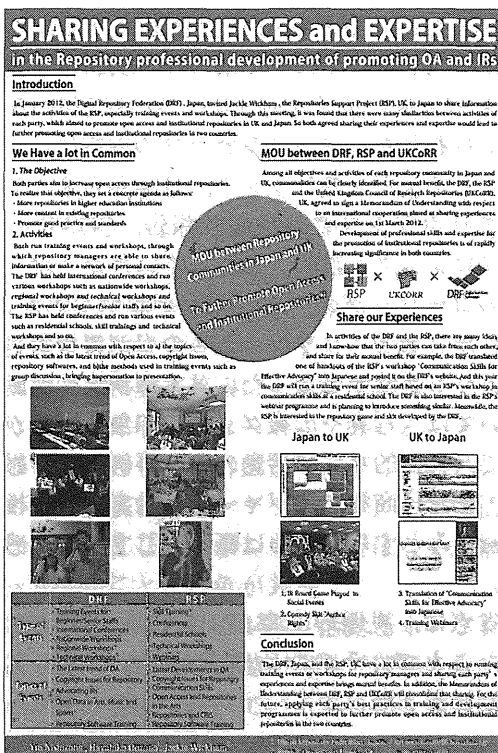


図7 Open Repositories 2012 出展ポスター



図8 ICTK2012 主会場 (Nimhans Convention Centre)

この国際会議にCOARがワークショップを出展することとなり¹⁸⁾、報告者は、日本国内のオープンアクセスリポジトリ活動紹介と、COARのワーキンググループ（以下、WG）3¹⁹⁾の活動報告を行うため、COARのメンバーとして出席することとなった。

6.1 準備

日本の事例報告については、国内で展開されているリポジトリ/オープンアクセス活動についての英文パンフレット²⁰⁾をDRFが既に作成しており、これを元にスライドを作成した。主張する点は草の根の広報活動であり、日本のリポジトリの趨勢は軽く触れる程度にし、各機関で担当者が取り組んでいる具体的な活動の紹介に多くを割いた。イメージが伝わるように写真を多く盛り込み（図9）、各大学で作成した広報グッズも実際に現地に持っていくこととした。またCOAR WG3の活動内容については、WG主査とメールで相談し、2月に行われたCOAR参加機関へのアンケート内容や、5月のCOAR年次集会でのワーキンググループ会議の内容を盛り込み、WG3の成果物を紹介しながら、リポジトリの設置・運営に関する経験の共有や担当者ネットワークの重要性を呼びかけることにした。（図10）は、JISCのメーリングリストでの話題がDRFのメーリングリストでも同様に議論となったことを説明している。口頭発表の表現についてはなるべく平易に、自分自身で理解し話せる英文をこころがけた。

渡航に関する準備としては、ビザの手配があった。インドは日本からの渡航に際してビザが必要となり、会議等出席用のビザと観光用は異なる。会議等出席のためのビザには会議主催者からの書類が必要となり、発行にもかなりの時間がかかる。なお、観光用のビザでも入国は可能である。

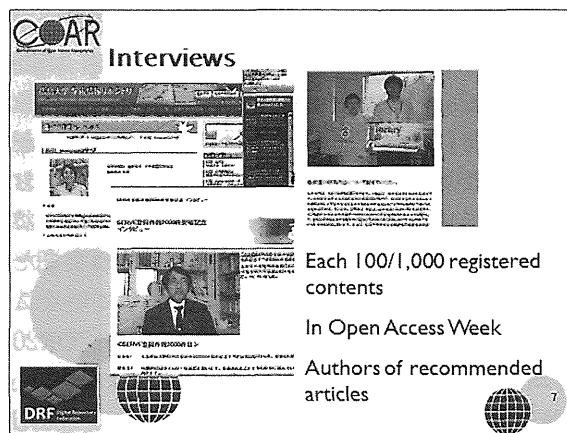


図9 日本の活動紹介スライド

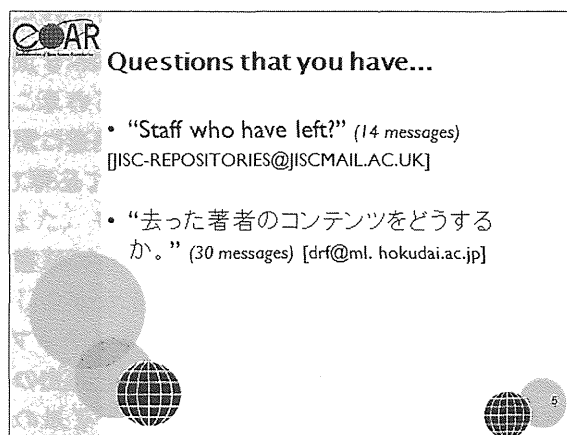


図10 COAR WG3の紹介スライド

6.2 COARワークショップの内容

COARワークショップは会議3日目となる7月12日の午後、3時間ほどであった。会議室を楕円に囲むテーブルに椅子を追加し、30名ほどの参加者の中で行われた。ワークショップの内容は、COARの紹介、インド、スリランカ、日本からオープンアクセスリポジトリの地域現状報告、COARの進行中のプロジェクト説明、となっていたが、飛び入りで別のヨーロッパのプロジェクト説明などがあり、また、インドとスリランカからの事例報告が当初の予定よりも長時間となった。日本の状況や活動報告については、写真や広報グッズの印象は大きかったようで、具体的な広報活動の参考事例として好評を得た。また、商業学術ジャーナル論文の著作権調査など、悩みとするところは概ね同じであると感じられた。

反省点は、説明の文章が十分に頭に入っていなかったことで、そのため発表がかなり拙い英語になってしまった。

6.3 会議全体

会議では名の通り、およそあらゆる館種の図書館と情報基盤にかかわる内容²¹⁾について、並行する4つのセッションの中で多くの発表が行われるものであった。また各日の午前にはヨーロッパのプロジェクトや課題についての基本講演、最終日にはオープンアクセスをテーマとしたパネルディスカッションも行われた。

会議の参加者はほとんどがインド国内もしくはスリランカであり、ヨーロッパからの参加者が1割弱程度にみえた。発表は毎回白熱し、各発表者の発表にかける意気込みが非常に感じられた。2日目の午後最終のセッションは翌日に持ち越されるほどであった。

DRTCの学生と思われる人々がバスツアーで参加し、会議の運営に多く携わっていたのも印象的であった。彼らは総じて人懐こく、よく喋り、日本に興味があるらしくランチタイムなどに話しかけてきた。

リポジトリやオープンアクセスについては、課題とするところはどの国、地域でもある程度の共通性がある。日本国内で個々の担当者がぶつかってきた課題や経験も、世界の他の地域で役に立つ。発表の機会があれば積極的に行い、情報や経験の共有を広げていくことが重要であると考えている。

7. 国際活動の在り方と展望

日本の機関リポジトリ（ひいてはオープンアクセス）を牽引してきた国立情報学研究所によるCSI事業は平成24年度をもって終了した。CSI事業の意義は、予算のトップスライスによって、学術情報流通の最大公約数的な課題に対する解決をプロジェクト群として実施したことで、欧米ではオランダのSURFやJISCのような助成機関が行っている機能を果たしたことにある。

この報告は、CSI事業の委託事業として、一定数の図書館職員が特定テーマの下に、国際会議での発表やポスター出展、英語による論文執筆などを継続的に行ってきた活動をベースにしている。その都度の研修を目的とした海外出張ではなく、海外の図書館員と同じ土俵（コモングラウンド）の上で活動することを目的として、かつ単年度ではなく、継続的に行ってきたことに特色がある。

その結果、日本のリポジトリ活動とオープンアクセスについての考えや活動が海外で理解され、かつそれが本稿の各項で述べている実質的な連携活動に結び付いた。

例えば、COARへの設立時からの参加や、イギ

リスのRSPとのMoU交換などはそのような具体的な成果の顕著な例である。海外のイニシャチブは属人的に担われることが多い（「顔が見える」イニシャチブ）。DRFの国際活動も継続的かつ（多くは）属人的に行われてきたがゆえに、人的コネクションを作ることが可能になり、それがこうした連携に結びついたのである。

その理念を後押ししたのがCSI事業であったし、そうした意味での財政支援はこれまでなかったのである。日本の図書館員及び図書館活動の国際的な認知が、リポジトリというごく一部の分野であれ、実質的に向上したことが特筆される。

研修を目的とする海外派遣の継続は重要な課題である。それとともに目的意識的な国際連携活動を継続することも見逃してはならない課題であり、ここ数年で実現された海外における認知や連携をこのまま放置して腐らせず、継続的に強化していくことが、最も重要な今後の課題である。

ポストCSIに向けて、DRFのみならず、大学図書館コミュニティが知恵を集めて、国際活動の新たな段階に適応していくことを次の目標としたい。

注・参考文献

- 1) 国立大学図書館協会海外派遣事業 (online)
<http://www.janul.jp/j/operations/overseas/> (accessed 2013-4-26)
- 2) Open Repositories 2013 (online)
<http://or2013.net/> (accessed 2013-4-2)
- 3) SPARC Digital Repositories Meeting 2010 (online)
<http://www.sparc.arl.org/meetings/dr10/> (accessed 2013-4-26)
- 4) SPARC Open Access Meeting 2012 (online)
<http://www.sparc.arl.org/meetings/oa12/index.shtml> (accessed 2013-4-26)
- 5) Open Scholarship 2006(online) <http://www.lib.gla.ac.uk/openscholarship/> (accessed 2013-4-26)
- 6) CERN Workshop on Innovations in Scholarly Communication (OAI7) (online)
<http://indico.cern.ch/conferenceDisplay.py?ovw=True&confId=103325> (accessed 2013-5-1)
- 7) Berlin 10 (online) <http://www.berlin10.org/> (accessed 2013-4-26)
- 8) Suzuki Masako, Sugita Shigeki. "From Nought to a Thousand: The HUSCAP Project". October 2006, Ariadne Issue 49 (online)
<http://www.ariadne.ac.uk/issue49/suzuki-sugita/> (accessed 2013-5-1)
- 9) Suzuki Masako, Sugita Shigeki. "From Nought to a Thousand: The HUSCAP Project". Open Scholarship 2006, Glasgow, 18-20 October 2006, The

- University of Glasgow.
<http://hdl.handle.net/1905/658>, (accessed 2013-5-1)
- 10) Stephen Pinfield, Mike Gardner, John MacColl. "Setting up an Institutional E-Print Archive". April 2002, Ariadne Issue 31
<http://www.ariadne.ac.uk/issue31/eprint-archives/> (accessed 2013-5-1)
<http://www.nii.ac.jp/irp/archive/translation/eprints/> (accessed 2013-5-1) に日本語訳あり。
- 11) Open Scholarship 2006. (online),
<http://www.lib.gla.ac.uk/openscholarship/>, (accessed 2013-05-01).
- 12) JISC による助成を受けている (2006 年 10 月～2012 年 3 月)。
- 13) 英国のリポジトリ・マネージャのコミュニティ。
- 14) 研究情報の公開に特化した情報システム。
- 15) "Open Repos2012". YouTube. (online)
<http://www.youtube.com/user/OpenRepos2012>. (accessed 2013-04-26)
- 16) ICTK2012. (online),
<http://drtc.isibang.ac.in/ictk/>, (accessed 2013-05-01).
- 17) 図書館情報学の研究、教育、研修のためのセンター。ランガナタンにより 1962 年に設立された。Documentation Research and Training Center: Indian Statistical Institute. (online),
<http://drtc.isibang.ac.in/DRTC/>, (accessed 2013-05-01).
- 18) COAR 議長のノーバート・ロッソー氏は本会議の Program Committee メンバーの一人である。またインドはヨーロッパ FP7 のプロジェクトにも複数関わっており、本国際会議にはヨーロッパから関連プロジェクトのワークショップが複数出展していた。
- 19) リポジトリおよびネットワーク構築支援および研修 (担当者のネットワーク) をテーマとするワーキンググループ。
- 20) Digital Repository Federation. "hita-hita" -- Institutional OA Advocacy in Japan. 2011, (online)
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?plugin=attach&refer=Digital%20Repository%20Federation%20%28in%20English%29&openfile=hitahita2011.pdf>, (accessed 2013-05-01).
- 21) たとえば、本会議の予稿集 (2 冊組) のテーマを見ると、図書館情報学教育 (カリキュラムなど)、公共図書館のサービスと e リソースやインターネット書店連携、機関リポジトリ、主題別のオープンアクセスや e リソース、semantic web などが挙げられている。

< 2013.5.8 受理 うちじま ひでき 筑波大学附属図書館情報管理課長, すぎた しげき 千葉大学附属図書館学術コンテンツ課長, すぎき まさこ 旭川医科大学図書館情報課長, にしぞの ゆい 鹿児島大学附属図書館情報管理課学術コンテンツ係員, つちでいくこ 大阪大学附属図書館吹田地区図書館サービス課専門職員 >

Hideki UCHIJIMA, Shigeki SUGITA, Masako SUZUKI, Yui NISHIZONO, Ikuko TSUCHIDE

The practice and know-how of international cooperation activities by the DRF (Digital Repository Federation)

Abstract : The Digital Repository Federation (DRF), operating with financial support through the Cyber Science Infrastructure (CSI) initiative of the National Institute of Informatics, is involved with numerous international activities relating to institutional repositories. In this paper, the authors report on some of the activities they have undertaken and the knowledge they have gained, beginning with attending international conferences relating to institutional repositories, and then giving oral reports, poster sessions, and contributing articles to overseas open access journals.

Keywords : Digital Repository Federation / DRF / ARIADNE / SPARC Digital Repository Meeting 2008 / Open Repositories 2012 / Open Scholarship 2006 / ICTK (International Trends in Knowledge and Information Dynamics) 2012 / international cooperation / published papers / oral presentations / poster presentations / overseas trips